

---

# 銀の刃に　を込めて

かりとぼるふ 893

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の刃に を込めて

### 【Zコード】

Z0734Q

### 【作者名】

かりとぼるふ 893

### 【あらすじ】

ある日少年は、兄の知り合いという女性から銀色のケースを受け取る。

そしてその日から少年の運命は動き出す。

転がりだした石のよう

少年の意思を交えることなく。

ただ坂の終わりを手指して

## ケース（前書き）

初投稿です。

生暖かく見守つてください。

感想をいただくと作者はハッスルします。

## ケース

カツ

俺は椅子に深く腰掛け窓を見つめていた。

カツ カツ

今日の月はいつもより明るい気がする。

カツ カツ カツ

いや？ 昨日の月もこうだつたか？

カツ カツ カツ カツ

いや、もうそんな事はどうでもいい。ようやく俺の願いが叶うの  
だから。

カツ カツ カツ カツ カツ

こうなるとこれまで日々も懐かしくなつてくる。この部屋でこ  
うして何度も月を眺めたのだろうか？ 正直もう覚えてはいない。

カツ カツ カツ カツ カツ カツ

だがそんな日々も今日で終わりだ。さあ、迎えの準備をしよう。

## カツン

よつやく願いが叶うのだから…。

開け放しにしている窓から春の風がふわりと吹き抜ける。この狭いが趣きのある部屋の隅々にまで風が満たされるたびに春がきたことをしみじみと実感する。この気温ならばそろそろ桜も咲き始めているころだらうから、中央公園あたりに散歩に連れていくのも良いかも知れない。

「ミシーチョットいつち来てー」

と、とつとめのことなどを考えているつむぎは暴君からのハグマー<sup>ル。</sup>

「はいはい。すぐ行くから待ってね」

後ろからはーーといふ返事が聞こえてきたので、俺はよつこいせと我ながら少しじじ臭いと思いつつも掛け声を掛け体を起こす。正直もう少ししたらだらとしていたかったのだが、行くと言つた以上行かなければあとが怖い。

そして、階段を降りて一階にある眞森の部屋に入る。

「つむ。すぐに下りてくるとは感心感心」

と、ベットに横たわり偉そうに宣つてこるのが、この部屋の主である眞森だ。俺と眞森との関係を説明するの話をすと何かと長くなるのでまた次の機会に譲ることにする。いや本当にやせこじこんだわこれが。

「んでなんか用か?まさかテレビのリモコン取つてーとかいつぶされた用事なら、俺は速攻かつスタイリッシュに自分の部屋に戻るぞ」「まさか、そんな訳無いじゃん。やつを玄関の呼び鈴が鳴つてたの。どうせ気付かなかつたんでしょう?」

「はい。おっしゃるとおりです。

「全く全然少しも聞こえなかつたな

と、偉そうにそつくりかえつてみる。

「はいはい。んな阿保なこと言つてないでさつたと玄関に行く。お密さんわしきから待つてるんだからね?」

「へーへー。でも、たまにはお前が出てみれば?新しい純愛ラブソディが始まるかもよ?」

「実現不可能なことを抜かしてなこでわしこと玄関に行く!」

と言つて追いつかれたので俺はおとなしく玄関へと向かう。

足が無い眞森の代わりに。

あれはもう六年も前の話だ。眞森と、俺の先生である眞森の父親、そして先生の奥さんが事故にあったのだ。

原因是対向車線を走っていたトラックの運転手の居眠り運転。中央分離帯を乗り越え、一直線に眞森たちが乗っていた車に衝突。そして一台の車はそのまま壁に激突、大破したらしい。トラックの運転手と先生たちは即死。そして眞森だけが奇跡的に生き残った。

いや、奇跡的というのはおそらく間違いだろう。両方の車が大破するほどの事故だ。いくら運が良かつたとしても生きているはずがない。おそらく先生が守つたのだ己の身を挺して。

俺は綺麗に掃除されている廊下を歩いて行く。うむ、きちんと掃除はそれでいるようだ。そしてふと庭のほうに目を向けると庭木も綺麗に手入れがなされており、池もきちんとされていた。さすが崩城家専属のハウスキーパー。この広い崩城邸を隅から隅まで塵ひとつ残さず綺麗に掃除し、庭木の手入れ、池の清掃まで完璧にこなすとは。そんじょそこいらのチラシを配っているメイドさんとはわけが違う。まあもつともメイド衣服は残念ながら着ていたことはないが…。

などとぐだらないことを考へてゐるうちに無闇矢鱈と豪勢な玄関に到着。ところがどつこい、まだ表門まで歩かにやいかんのよ。

そして俺がやたらと『テカイ表門を開けるとそこにはオッパイ神がいた。

正確には銀色に光るケースを輸入物のいかにも排気量の多そうなバイクに立てかけ、自分もハンドルの上で組んだ腕の上に胸を置おかれている大変グラマラスなお姉様がいらっしゃった。

（何だあの胸は！？『デカイ』『デカすぎる！』F？G？いやひょっとしてH！？あんな胸がこの世に存在しても良いのか！？いや良くない。嗚呼素晴らしい反語表現！それにあの大胆なライダースーツ！あれじや体のラインがまる分かりじゃん！むしろ見せつけてる！？この従順な子羊に見せつけちゃってんの！？ってなんてアホな事を考へてんだ俺は！？落ち着け。落ち着くんだ八雲照騎！でも眞森のナイナイペツターンな胸と本当に同じ胸かと神に問いただしたくなるような圧倒的なボリューム！そしてその核兵器級の胸にリベリオンするかのごとく細く引き締まつたウエスト！さらにそこから続く禁断の知恵の実もかくやという魅惑の果実！ああ、俺はもう死んでもいい！死して一片の悔いなし！神様、そして俺を産んでくれた顔も名前も知らないお母さんありがとう！本当にありがとう！

「おい『ロラ』！聞こえてんぞこのウスラトンカチがアー！誰がナイナイペツターンだつてエー？てめえ憶えてろよオー！ゲヘナの炎でこんがりウエルダンにしてやるウー！」

どうやら途中から声に出でていたらしい。照騎くん大ピンチ

「あら、あなたずいぶん情熱的な恋人を持つてるのね」

俺がどうやって眞森の怒りの矛先から逃れようかとあれやこれやと考えていると、オッパイ神さまが声をかけてきた。

そのクスクスと笑つている声は、一片の汚れのない童女の張りと、過酷な人生を乗り越えてきた老婦人の深みを兼ね揃えた不思議と色っぽい声であった。

「で、ここのが崩城邸でいいのよね？　見たところ表札が出てないようだけど…」

オッパイ神さまが少し不安げな声で聞いてきた。この崩城邸は諸事情により表札を出していないのだ。

「え？　あ、はい。たしかにここのが崩城邸ですが…。あつ、眞森に用があるんですか？　だったら少し待つてもらつか、直接母屋まで来てもらつことにりますが…」

脳みそがトリップしている状態で質問されたので、若干返答が遅れる。

「いいえ。あなたに用があつて来たのよ、八雲照騎君

「…………え？　今なんて？」

「だからさみに用があつて來たつて言つてるの。正確には渡す物

と黙つてオッパイ神さまはバイクに立てかけていた銀色のケースをコンコンと叩く。その銀色のケースは縦が十センチ、横が三十五センチほどで、高さは女子の平均身長ほどもあり、重さは中に入つて

いる物によるが、それなりに重量がありそうだった。

「渡す物つていつたい誰からのものなんですか？ 僕にはそんなゴツイものを送つてくる知り合いはいないんですけど…」

「…とか、今まで俺宛の郵便物が来たことは年賀状を除いて一度もない。我ながら友達いねえな、チクショウ。」

「フフツ、誰からだと思つ？」

「……………いえ、全く検討がつきません…」

「大ヒント。6年前にいなくなつた人からよ」

「6年前にいなくなつた人？ 何を言つてるんだこの人は？ 僕の知つてゐる人物の中での条件に該当するのは一人しかいない。そしてその人物から俺宛に荷物が届くはずがない。届くはずはないのだが、でももし、もしそれが本当だとしたら…？」

「兄貴から…なんですか…？」

俺はその一言を喉から搾り出すように呴いた。緊張しているのが自分でもよくわかる。

「E x a c t r y」

その通りよ、と彼女は静かに呴いた。

「兄貴から俺への届けものつていつたいどういうことですか？ いつ預かつたんですか？ というか、あなたは何者なんですか？」

兄 い

貴の居場所は知ってるんですか？ 連絡先は？ 今何をしているかは？ 急にいなくなつた理由については？」

俺は彼女に詰め寄りうつした。やつと見つかつた行方不明の兄貴への手がかりだ。見たところ兄貴が失踪したことについて、何らかの事情を知つてゐるようなので、なんとしても何らかの情報を教えてもらわなければ。

「克騎さんについて知りたいのは分かつてゐるから、まずは落ち着きなさい。話すと長くなるから詳しいことは省くけど説明するから」

彼女は右手で俺を制止したまま、しゃべりだした。

「がつかりさせるようで悪いけど、私も克隆さんの失踪については、そつ詳しく知つてゐわけじゃないの。六年前ふらつと私の店に現れたと思つたらこのケースをあなたに今日渡すように私に言つて、そのまま、またふらつと何処かに行つちゃつたのよ。だから今克隆さんがどこにいるかはわからないの」

「さすがに私も中身が気になつたから、後日克騎さんにケースの中身を聞いてみようと電話をしたの。でも克騎さんはでなかつた」

「その後、私も氣になつてアレコレ調べてみたんだけど、結果は梨の礫。分つたことといえれば最後に克騎さんが目撃されたのが六年前だということだけ。それ以外のことは全くわからなかつたわ。生きているのか死んでいるのかさえも」

まあ、克騎さんのことだから死んでるひつてことはないでしようけど。彼女はそう締めくくつた。

「……結局、冗談については何も分からぬことですか……？」

俺はポツリと呟いた。正直このまま地面に座り込みたい。手がかりが見つかったかと思えばこれだ。

「いえ。そういう訳でもないのよ」

彼女はあっさりと言った。知ってるのか知らないのか結局どうちなのだろうか？

「でもまあ、これ以上のことは話せないわ。まだ聞きたいのならこの店にきて」

彼女はそう言って俺に一枚の紙を放ってきた。見たところそれは住所と簡単な地図が書かれており、そこに彼女の言う店があるのだろう。

「あ、あとこれもね」

彼女はそう言って俺にさらにもう一枚銀色に光る何かを放ってきた。手のひらを開いて、空中で難なくキャッチしたそれを見てみるとそれは銀色に光る指輪だった。大きさはちょうど親指に入るくらいの大きさで、表面にはどこかの外国語だろうか？ 見たことも読み方も分からぬアルファベットの親戚のような文字がびっしりと刻まれていた。

「ハイ。これでラスト」

そう言って彼女は放ってきた。

銀色のケースを。

「あら？ ピリしたの？」いきなりそんな奇声を上げて？

「あなたがいきなりこんなモノを放つてくるからですよ！」

俺は落としかけたケースを引き抱えたまま、キヨトンとした表情のオッパイ神様に怒鳴り返した。オッパイ神さまがホイッと軽そうに投げていたから、軽いのかな？と思つて片手で受け止めようとしたがとんでもない。とつさにもう片方の手で支えなければ取り落としてしまうほどの重量だった。いつたい何キロあるのだろうか？

「まあいいわ。たしかに渡したからね」

それじゃあバイバイと言つてオッパイ神さまはバイクのエンジンをかけ始めた。

「ちょ、ちょっと待ってください。」のケースの中身はなんなんですか？」

俺は慌てて質問をした。よく良く考えてみればこれはアノ兄貴から贈り物なのだ。どこか外国の謎のドルメンとかならまだしも、最悪幸せになれる白い粉とか、ビジヤのマフィアから巻き上げた拳銃とかの可能性もある。

「ああ、それの中身？ 刀よ刀。ただしなんでも切れる刀」

もかわいいんだから、ぐだつて切れるわよ。そう言い残し、オッパイ

神さまは颯爽と去つていった。

## 刀

俺、八雲照騎は逡巡していた。

横暴な幼なじみに1年365日振り回されている関係で、メンタル面についてはかなりの自身があつたのだが、どうやらまだまだ鍛錬が足りなかつたらしい。

だが、どうか言い訳をさせて欲しい。

ついさつと俺は、兄の知り合いを名乗る、やたらとグラマラスかつセクスウイーなオネエサマに失踪した兄についての話を聞かされ、おまけにどびつきリショックキングな置き土産をもらたのだ。

そう、置き土産。愛しいクソッタレ兄上様から俺への贈り物。

サガシモノからのオクリモノ。

……正直言つて、こんな不吉極まりない物はすぐさまドブへでも捨ててしまいいたかった。幼い頃から、あの横暴極まりない兄に関わつてろくな目にあつた試しがない。

あえて具体例をあげるとすれば、俺がまだピュアピュアな小学生だった頃の話だ。学校から帰宅した兄が俺に綺麗にラッピングされた箱を渡してきたので、何だろうかと思い開けてみたらいきなりその箱が爆発したのだ。

俺ごと木つ端微塵に。

……後に聞いてみたところ、あの箱は兄の友人がいつものお礼に渡してきたのだが、なんとなく嫌な予感がしたため俺に開けさせたらしい。そんなことがあったので、それ以来俺は兄から物は受け取らないようにしている。

だが俺は兄貴からだというケースを受け取った。そしてまだ捨てていない。

アノ兄からの贈り物だ。ならばにか兄についての手がかりになるかもしない。

そう思つたからだ。

やはり眞森にも見せるしか無いか。俺はそう決心し、銀のケース片手に眞森の部屋の戸を開いた。

眞森の部屋は崩城邸の一階にあり、中庭に面しているため日当たりも良い。内装の方はといふと、年頃の高校生らしくおしゃれな雑貨屋や、小洒落た家具などが配置されており、持ち主のセンスの良さが伝わってくる。

そして、その部屋の主である眞森は、いつものように部屋の端に置かれているベットに寝そべっていた。

純白の下着姿で。

「…………何してんだ？」

せりに詳しく述べとフコフコのヒモパンを履いて。

「……ついに頭が湧いたのか？」

俺は呆れた顔でそう聞いた。俺は別に自分の家だから眞森がマツパでいろいろがコスプレしてようがどういふつたりは無いのだが、さつきまで服を着ていたのに戻つてきたらページしているのだ。

さすがに一言言いたくな。

「なンで？ ナンでデスつて？ よくモまあ、ソンな事ガ抜け抜けと言えるわネ……」

「…………そんな地獄の底から響いてくるような声でささやかないでくれよマイハニー。ゾクゾクくるだろ。…………つーかまじでワタクシ何か粗相をいたしましたっけ？ とんと身に覚え無いのですが」

「…………さつき玄関で人の身体的特徴を論つてたのは誰だったっけ？」

「…………あー」

衝撃的な出来事がタンデムでやつてきたせいですっかり忘れていたが、そういうえばそんな事をついうつかりシャウトしてしまったかもしねれない。

「ていうか、誰がナイナイのペッタンよ！ 去年の今頃と比べたら3//1も大きくなってるんだからね！ 3//1も！」

「眞森、それは誤差の範疇だ」

「セソチな、りともかく、アリつなり確實に誤差だ。

「へこつか……。」

「お前の胸の成長具合せの際どいでもいいかい、まあとつあえずこれを見てくれ」

一刀両断。長くなつたのでバシサリと切り捨てる。

「…………どうでもこいつてひどくなー?」

眞森が拗ねたように頬を膨らませてしる。「ふふ、こんな表情も小動物チックでじつに可愛らしこ」

「んな拗ねたよつな顔すんなよ。今晚風呂はおまかせやんとモハモハしてやるから」

と、俺はドヤ顔で言つてみる。あ、俺じゃなくて僕か。

「…………あんた学校でそんな事言つたら殺すからね」

「イエス コア マジョステイー。しかと肝に銘じておきます」

ケースを受け取った眞森はひつくり返したりして隅から隅まで眺めた後、俺に質問してきた。

「これ何?」

「分からん」

即答。

「……それじゃあ、送り主は？」

「兄貴」

これまた即答。そしてそう答えた瞬間、眞森の表情が変わる。

「…………兄貴ってヨシくん？」

「それ以外に誰か俺に兄貴がいたか？」

「というか兄貴以外に親族はない。たぶん。

「でもヨシくんからひどいことひつ事なの？ だつてヨシくんは……」

「そひ、ただいま絶賛失踪中。あずけてたんだとさ知り合いで」

俺はオッパイ神様から聞いたことをかいづまんで説明する。

「…………要するに何にも分かんないつてこと？」

「んーそもそもないっぽい」

「ないっぽいつて？」

「なんでも知りたきやそのケース持つてこじまで来いだとさ」

俺はポケットに入っていた地図を眞森に見せる。せつまちよろつと見てみたのだが、その地図の書いてある場所はビームの街の繁

華街周辺らしかつた。

ついでに、この街のことについて少し説明すると、この街は川を挟んで北側に住宅地と公園がある居住区広がっており、南側には役所や、駅、ショッピングモールなどが広がる都市部が広がっている。そして俺と眞森の通う学校があるのは、川を渡つてすぐの街側だ。

「ふーん……で、行くつもりなの？」

「まあ、行こうかなと思つてるんだけど、どうした？」

「……だって、なんかその人怪しくない？　本当にその人ヨシくんの知り合いなのかな？」

「ああ、それはたしかに俺も思つたけどな……。なんつーか、あそこまで怪しいとむしろすんなり納得できるつーか。ほら、だってアノ兄貴の知り合いだぜ？　怪しくなかつたらそっちのほうがむしろ怪しい」

アノ兄貴は、性格破綻している割には、なぜか人を引きつける魅力のようなものを持つていた。その魅力は年齢、人種、性別を問わず有効で、非常に多種多彩な人間が兄貴の周りには常に集まつていた。

そして、兄貴が失踪する前に何人が兄貴の知り合いに会つたことがあるのだが、まともな人間は一人もいなかつた。

一例を上げるならば、二口一口と底のしれない笑を浮かべている青年。やたらと長い黒髪で超絶美人なのだが非常に個性的なしゃべりかたをする少女。銀髪碧眼で西洋人形のような外見なのだが、こ

つてこの関西弁を喋る女の子。

そして今日のお姉様。

もし持つてきたのがあのオッパイ神様でなく、そのへんのパンピーナらおそらく俺は信じなかつただろう。

ベシトの上で、フムフムと納得している様子の眞森がふと思いついたように呟いた。

「ねえ、これの中身何かな？」

指でコンコンとケースを叩きながら聞いてくる。

「刀だとさ」

二  
丁  
?

「そう、ジャパニーズブレード。ただし何でも切れる優れもの。」  
ニヤクだつてスーパスピ

それってなんて斬鉄剣ですか？ そんな幻聴が聞こえる。

「ねえねえ。それじゃあ、開けてみない？」

眞森がキラキラとした目で見つめてくる。そういうえば眞森は昔つから、先生たちから貰つたプレゼントを一一七七しながら開けてたつけ。

「そりだな。俺もちよつと気になつてたし……。んじゃ、いつまよ

開けてみつか

「イヒ――イ!」

そういう訳なので、早速ケースを開けてみる。

ケースの造り 자체は簡単なもので、鍵などの類はついておりず、蓋を固定するための留め金だけが付いていた。

……ガチャリ　……ガチャリ　……ガチャリ

……何だらうか、留め金をひとつ外すことに何か……何か良くな  
い物が漏れ出してくる……そんな嫌な感じがする。

どうしてだらう?　このケースを開けてはいけない気がする。開  
けてしまえば何かが変わってしまう……そんな嫌な気がする。  
『このまま、また留め金をかけ直してしまえ』

頭の中でもちやき声が聞こえる。

『そして何処かへ捨ててしまえ。なーにバレやしないことよ』

『それで万事丸く収まる』

『開けたら多分引き返せないぜ?』

『あいつと口クでもないことが起こる』

『それでもいいのか?』

そう、誰かががさをやく。

そうだ。今さら俺が兄貴に関わる必要なんて無いんじゃないかな？  
兄貴が俺に送りつけてきたケースを開けるつてことは、そのまま  
アノ兄貴ともう一度関わり合いになるということだ。

ならばこのまま……。

「……………ミジ?」

「えつー!?」

「なんか最後の留め金に手をかけたまま、怖い顔してたよ?  
どうかしたの?」

「いや……何でもない。何でも」

……………そうだ。捨てるもクソもない。この部屋に入る前に決めたじ  
やないか。それになんかヤバイもんが入つてたら、そん時改めてボ  
イすればいい。

『開けるのか？　あーあ。どうなつても知らないぜ?』

黙れ。人の頭ん中でブツブツ囁くな。

俺はもう決めたんだ。

……ガチャン

最後の留め金を外す。

「……開けるぞ」

俺はケースの留め金をすべて外し蓋を開いた。するの中には、

「え……？ なに……これ……？」

「…………つづー？」

白銀に輝く日本刀らしきものが入っていた。

刃長さはざつと百一十一～百三十三センチぐらいだらうか？ 柄も含わせると、長さはゆうに五百五十センチを越えている。

「刀……なのかな……？」

「…………」

眞森が自信なさそうにつぶやいた。それもそうだらう。分類的には太刀であろうその刀は、鞘も柄も金属でききていた。

翼の生えた幼子、髪を蓄えた老人、肉付きのいいふくよかな女性。

鞘や、柄の部分まで、優美な装飾が施されているそれは、人を切るための物騒な道具ではなく、どこか外国の洒落た美術館のショーケースが似合う美術品にも見えた。

「きれい……」

しかし、それは決して美術品ではなかつた。試しに手にとつて少し抜いてみたが、刃はきちんとついており、刃のきらめきは、自らが武具であると、人を殺す道具であると、自己主張していた。

そして、柄の横面には文字が掘りこまれており、そこには、

「えり……えり……れみや……？ なんだこれ？」

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ 日本語に訳すと、神の叫び……かな？」

「髪の叫びね……」

「それじゃメテユーサだよ」

「わかつてゐる」

「空気がシリアルスだつたから少しボケただけだ。

「キリストがゴルゴダの丘で処刑される際に言つた言葉でね、結構解釈に諸説があるの」

「お前よく知つてんな」

眞森の小ネタを聞きながら、俺は刀を抜く。きちんと手入れされていたのだろうか、剣先までサビはひとつもなく、眞森の部屋に差し込んでいる陽光を反射させ、キラキラと輝いている。

反りは中反り、刃文はのたれ乱れ刃、切つ先は火炎帽子。

「……なかなかの業物だな」

「わかるの?」

「ああ」

まあ、なんとなくだが。

「なかなかって、具体的には?」

「そうだな……。使い手にもよるが、それなりの腕の人間が使えば  
鎧(よろい)ごと中身をスライスハムにできくらい……かな?」

俺は刀を目の高さまで持つてくる。刃にはただの少しも欠けはなく、また刀身にはただの少しの曲がりもない。まいじつ事無き名刀だ。

ただし、それはこの刀の材質が鋼ならば、だ。

独特の金属光沢。

日本刀にはありえない輝き。

人殺しの道具にはありえない輝き。

この輝きはもしかすると……。

「ねえミッチ、この刀の材質って……ひょっとして銀?」

「……やつぱそう思つうか?」

ひょっとして、そうじやないかなーぐりいに思つていたが、眞森  
がそういうのなら、やはりそういうのだろう。

しかし刀の材質が銀？「冗談だろ？ 銀は展性、延性がとても  
大きい。展性、延性が、だ。そんなモノを刀の材料にしたらどうな  
るか？ 答えは簡単だ。柔らかいのでとても使いものにならない。  
きつとすぐには曲がってしまう。

いつたいどりう事なのか。

少なくとも、これがただの刀でないことだけは確かだ。

「ねえ、試し切りしてみない？」

俺がウンウンと頭を悩ませていると、眞森がそんな提案をしてき  
た。しかし試し切りか。いいかもしない。どうせ兄貴の送つてき  
たものだ。万が一折れても問題はない。

……それに本当になんでも切れるかもしれないし。

「……試し切り自体はいいが、眞森」

「え？ なに？」

「まづ服を着る」

そのまま眞森を外に連れ出せば、近所の有閑マダムの皆様から、  
あらぬ誤解を受けるようになるだろ？

俺は眞森に着せてやる服を選ぶべく、タンスの方へと向かった。

…………この時の俺はまだ気づいていなかつた。今までのあたりまえの日常が終わつたこと。

そう。俺の平穏な日常は、この日、麗らかな畳下がりに終わりを迎えていた。

銀色に輝く、一振りの刀によつて……。

## 「つかり&魔法

「ミシー。何してんの」  
「ひー

堀から街並みを見下ろしながら考え事をしていると、眞森からお呼びがかかる。その右手には、さつきまで通話していた携帯が握られている。

眞森に服を着せた後、俺たちは中庭に出ていた。

何のためか？ それはもちろん、

「で、ハーメルさん何て？」

「うん。どうせ捨てるからやつていいって。むしろ『細かくしてくれたほうが、運ぶのが楽なので、よろしく照騎くん。ベストはみじん切りです』だつてわ」

THE 試し切り。

俺は苦笑を浮かべる。ハーメルさんは本当に切れると思つて言ったのか、それとも冗談なのか。

子供の頃からずっと世話になつてきているが、ハーメルさんの底は未だにしれない。

「と、言つてなでにしき、頑張つてこれぶつた切つてね」

やう言つて、眞森は傍らの、これ、を軽く叩く。

……俺は眞森がポンとたたいた、これ、に目を向ける。

、これ、

眞森はまるで巻藁か何かのよつた、軽い調子で言つてこいるがとんでもない。

眞森の横にズモモと鎮座する、これ、。やつ。、これ、の正体とは……。

「……いくなんでも、これはむりじゃねーか？」

全長が、俺の身長よりわずかに低いだけの、石の灯籠だつたりする。

なお、詳細な描写をすると、形は全体的に曲線を帶びており、柱の部分には、エンタシス法と言つ奴が使われているのだろう。下から上に上がるにつれて、緩やかに細くなっている。そして所々は苔にむかれてボロボロになっているが、上部や、台座などには細部に何かと手がかかっている。そして……そしてなにより無茶苦茶硬そうだつたりする。

「えー。だつてさつき、何でも切れるつて言つたじゃん」

「いや、たしかにそうは言つたけど……でもそれ言つたのは俺じゃないし。それに刃が折れたりして、飛んできたらあぶ」

「いーかりさつとやるー 男ならグダグダ言わない!」

「……ハイ」

こんな時に自分の無力さを、一番痛感する。

まあ、いつまでもブチブチ言つても仕方が無いので、気分を切り替えてさっさと切ることにする。

……腰に手を伸ばす。

カチリ……。

ズボンにベルトで止めてある、神の嘆きの柄に触れた瞬間、自分の中では歯車が噛み合つ感覺がする。

崩城に引き取られてからの訳十年間。その歳月で培われたものにより、俺は刀を握ると、瞬時に心を切り替えることができる。

今まで動いていた機関が止まり、別の機関が動き出す。頭の中から社会生活をしていくために必要なあれこれが抜けいき、かわり別の方が満ちていく。守るために知識を捨て、害するための技術を得る。

スポーツ選手等が、試合前に氣を引き締める、などという程度ではない。

完全なる精神の切り替え。

……思つて、やつとこれがいわゆる『極み』といつやつなのだろ  
う。

ちなみに先生は、刀を握らなくても、この境地に達することができ  
ていたらしい。

そんな事を考へてゐる間も、体は記憶に従い動く。

右半身で構え、重心を落とし、右手で柄を握る。

左手で鞘を掴み、地面を踏みしめ、肩の力を抜く。

何千、何万と繰り返した型だ。文字道理体に染み付いてさえいる。  
ただし、神の嘆きは普段使つてゐる刀より長いため、若干細部を変  
更する必要はあるが。

しかし、なぜか神の嘆きは、初めて握る刀とは思えないほど、俺  
の手に馴染んでいた。刀身にまで神経が通い、腕が伸びた様な感覚。  
刀身を撫でる風さえも感ぜられる。

今まで握った刀の中で一番シックリとくる。

……この刀ならいけるかもしだれない。

そう思わせるだけの何かがあった。

「もつと下がつてろ」

眞森を縁側の下まで下がらせる。

そして、

「……フツ！」

軽く息を吹き、

崩城流居合・椿一線

一息に石灯籠の上部に斬りかかる。そして一步踏み込み、返す刀で、

「セエイヤアアアアアアアアアアア！」

崩城流居合・重ね椿

石灯籠の竿を切る。

……手応えあり。

俺の手には、たしかに何か固いものを切断した手応えがあった。

……が、

「……アッレヒー？」

納刀までしました後も相変わらず、石灯籠は俺の前に鎮座していました。

……一秒、三秒、四秒。

何秒か待つてみるが、切れるどころか、欠けてさえくれない。

「……おつかしいな？　たしかに手応えがある。残線も綺麗にいつたし、力加減もバツチリだったのになあ……って眞森？　どうした？」

「//……//シ……。へ、へ、へ……」

「屁？」

「堀が……」

俺は、ポカーンとした表情の眞森が指差す先を見つめる。その先には、

「へ？」

石灯籠の向こう側、五メートルほど後ろにあるはずの堀が、逆Vの字型に綺麗にポツカリ無くなつており、代わりに街の風景が覗いていた。

「……なあ、眞森？」

「……なに、ミツ？」

「……たしか、さつきまであそこに堀があつたと思つんだが？」

「……あら奇遇ね。私もそう思つてたとこ」

もう一度堀があつた部分に目をやるが、やはりポツカリと欠けた

ままだつた。

欠けた部分に近寄つてみる。

「……綺麗に切れてるな。それにこの角度は」

振り返つて確認すると、すぐ後ろに石灯籠がある。そして石灯籠に刻もうと思っていた斬線がそつくりそのまま塀に刻まれている。つまりは、

「……こつやあ、俺がやつちまつた……のかな?」

状況証拠から察するに、どうもさうらしい。

「……なくなつちやつたな、塀」

「…………そうね」

「…………」

……嗚呼。風邪が心地良い。

俺は現実逃避をしつつ、塀の切れ間から吹いてくる風邪を受ける。そしてしつと腰に刺さっている神の嘆きに視線を落とす。

……なんかヤバイもん貰つちまつたかも。

……そう思わずにはいられなかつた。

……つーか塀どうじよ。

「うえ——ん、うえ——ん！」

夜道を歩きながら延々と匂のことを思い出していた思考が、びし  
からか聞こえてきた、甲高い子供の泣き声で、今に引き戻される。

俺は現在、オッパイ神様に渡されたメモに従い、待ち合せ場所  
に向かっているその途中だ。

その途中。ちょうど崩城邸のある高級住宅へと至る坂道を町へと  
下っていたそのとき、甲高い泣き声が耳へと飛び込んできた。

その音は派出所を探るまでもなく、俺の前方、ちゅうと傾きが急に  
なっている辺りから聞こえてきた。

早足で駆け寄つてみると、そこには地面上にしゃがみこんでいる少  
女があり、傍らには近所のスーパーの袋が転がっていた。

「どうしたの？」

俺はしゃがみ込み、少女に田線の高さを合わせると、できるだ  
け優しい声で少女に話しかける。

……雪久あたりが今の俺を見ていたら、きっと酔でも飲んだよう  
な顔をするだろうな。

そんな事を考へていると、少女は顔を上げ、涙で潤んだ瞳で俺を見つめながら、訥々と喋りだした。

「えつぐ……お、お、お使い頼まれてたのに転んじゃって……ひっく……ひっく……卵が割れちゃって……」

傍らのビニール袋に田をやると、そのなかにある卵のパックらしきものが、たしかに内側を黄色くしていた。

「ひっく……それに、せ、せつかく買つてもらつた服も……」

それだけを喋ると、少女はまた声を出して泣き出した。

「おーよーし。よく頑張ったね。もう大丈夫だからね」

そう言い、片腕で御抱き寄せると、ひときわ大きな声で少女は泣き出した。……やはり子守は俺には向いていない。

眞森や鶯なら上手く慰めるだろうし、雪久なら持ち前の器用さを発揮し、少女を笑わせることができるだらう。

ソラこう時に、つぐづぐ自分の無能さを痛感する。だが、ソラapisは眞森も鶯も雪久もいないのだから、俺がどうにかするしか無い。

俺にしかできない方法で。

そういう訳で、少女を抱き寄せていない方の手で、スーパーのビール袋を引き寄せる。

体の横の方まで引き寄せると、その上に手をかざす。……そして、自分の中にある機械に火を入れる。

燃料が注入され、温度が上がり、蒸気が満ち、ピストンが動き出す。

歯車が回り、ふいぐるま空気を送り込み、全体がきしみ、絡繰りが唸りを上げる。

頭のてっぺんからつま先まで。体中の血液がマグマにでも置き換わったような感覚。神経の伝達速度はより高速になり、時折バチバチと火花を散らす。

体中が奇跡を起こすべく活動を始める。

奇跡。

奇異なる先人らの足跡。

かつては歴史の大舞台で活躍していたにかかわらず、その地位を奪われた者たち。

その足跡を、俺はたどる。

……とまあ、カッコつけてみたものの。

「ほい」

掛け声ひとつで、卵がビデオの逆再生のように元の形に戻り、

「……え？」

「わあんぱいぱいの～ひょい！」

伝統的な呪文で、裾のほうが破けてしまい、泥がついた服も元通りになり、

「……ふえ？」

「アーデバビデブー！」

謎の呪文(?)で、ついでとばかりに擦り傷も直してみる。

「……はい？」

奇跡の実態は、実はこんな感じだつたりする。奇跡だの何だのかつこをつけているが、その本質は、所詮道具にすぎない。つまり、箸だの、シャモジだのとなんらかわらない。

……怪しげな呪文演唱だの、魔方陣だのもいらないし。

眞森や鶯は、俺や雪久が魔術を使つたびに羨ましそうにしていてが、使える人間に言わせてもらつと、ちょっと珍しい道具を持つているぐらいの感じである。

「ほーら。もう泣きやんで。卵も服も綺麗サッパリ元通りだから」

少女は最初、ビールの袋と自分との間で視線を行き来させていたが、やがて意を決したようにこちらを見つめると、

「……お、お兄さんは、何者……ですか？」

と聞いてきた。

……答えに困ることを聞くな、このお子ちゃん。

「え？ ボク？ ボクは何てこと無い、ただの通りすがりの高校生だよ？」

「じー」

いかん。これでは、某ネズミーランドの花形キャラだ。

「だ、だからホントに、通りすがりの高校生」

「じー」

「……」

少女が真剣な眼差しで見つめてくる。その瞳は真っ直ぐ俺を貫いており、なんとしても真実を知るまでは動かないと物語っている。

……どうやら言ひ逃れはできないらしい。

腕時計に視線を落とす。短針と長針が指示する時刻は、午後六時二十七分。……どうやら適当に聞こべるめる時間もないらしい。

……狂会の方も暇じゃないんだ。小学生にバレたぐらいじゃ来やしないだろか。それに小学生なら、口止めも簡単に済むか。

無理やり自分を丸め込んだ後、俺は天を仰ぎ、ガリガリと襟足の

部分を搔きむしると、ため息をひとつ付き、

「…………魔法使い」

そう答えた。

そう。

俺は科學と同じ胎盤から生まれ落ち、同じ母乳を口にしたにもかかわらず、様々な理由から社會より排斥された技術。その使い手。その扱い手。

魔法使いだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0734q/>

---

銀の刃に を込めて

2011年11月24日16時50分発行